国際常民文化研究機構「第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学」第 1 回研究会

2012 年 7 月 7 日

神奈川大学 27 号館 101 号室

植民地期日本語朝鮮説話集の刊行とその意味

キム クァンシク
金　広植

博士論文の構成

序章．日本語朝鮮説話集の刊行の意味
　第 1 節．研究の現状と課題
　第 2 節．課題の設定と論文の構成
第 1 章．植民地期における朝鮮説話集の性格
　第 1 節．植民地期に刊行された朝鮮説話集
　第 2 節．日本語朝鮮説話集の内容と性格
第 2 章．日本語朝鮮説話集の中の新羅の発見
　第 1 節．日本語朝鮮説話集と新羅
　第 2 節．古蹟調査事業と新羅の発見
　第 3 節．新羅説話の内容と分類
第 3 章．植民地期における新羅説話の解釈―昔脱解説話と延烏・細烏説話を中心に
　第 1 節．脱解と「延烏・細烏」を巡る言説
　第 2 節．日本語朝鮮説話集に収録された脱解と延烏・細烏
第 4 章．新羅伝説の発見者、大坂金太郎
　第 1 節．大坂のイメージと新羅伝説
　第 2 節．「慶州の伝説」と創られた美談
　第 3 節．新羅説話と日鮮同祖論
第 5 章．植民地期朝鮮における教科書と新羅神話・伝説
　第 1 節．先行研究の検討　―朝鮮読本と朝鮮説話
　第 2 節．朝鮮読本における新羅説話
　第 3 節．朝鮮読本における脱解
　第 4 節．歴史教科書における新羅像と脱解
結章．日本語朝鮮説話集の位置づけ
【付録 1】新たに発見した日本語朝鮮説話集の中の説話目録
【付録 2】慶州の写真、新羅第四代王・昔脱解関連
【付録 3】『伝説童話調査事項』（1913、朝鮮総督府学務局編輯課調査）

◎「植民地期に刊行された日本語朝鮮説話集」（以下、日本語朝鮮説話集と略記）について考察

⇒「朝鮮説話集」の範囲：朝鮮において朝鮮人の間で伝承される説話を集めた単行本に限定

⇒背景：近代以降、民間伝承の持つ意味の重要性が高まり、朝鮮説話の中には朝鮮民族の心性と原型の一端があるとされ、1908 年以来、多くの日本語朝鮮説話集が刊行された。

1910 年代まで：朝鮮（人）を理解するための読み物として刊行

1920 年代：児童教育の為の「童話」の重要性が高まり、多くの童話集が刊行され、教科書に収録

朝鮮総督府編纂教科書の中の説話収録過程

⇒1924 年に朝鮮初の近代童話集、朝鮮総督府『朝鮮童話集』刊行。従来はその編者及び発行の経

緯が不明だったが、筆者は新資料の発掘、遺族の聞き取りを経て、『朝鮮童話集』は学務局の嘱託田中梅吉（東大ドイツ文学、ｸﾞﾙﾑ研究者）によって編まれたものであることを明確にした。[1]

1912 年、朝鮮総督府学務局編輯課 俚謡・俚諺及び通俗的読物の調査

1913 年、朝鮮総督府学務局編輯課（小倉進平）朝鮮伝説・童話の調査⇒第 1 期朝鮮語教科書へ反映

1916 年 10 月末に田中梅吉「朝鮮総督府臨時教科用図書編輯事務嘱託」として朝鮮民間伝承を調査

1917 年 4 月 田中、「童話の話 附朝鮮人教育所感」（『朝鮮教育研究会雑誌』19 号）を発表。

1917 年 5 月 「朝鮮童話・民謡竝俚諺・謎（朝鮮童話・民謡・俚諺・謎）」20 号～30 号（～1918 年 3 月）。

1924 年 9 月 1 日、田中梅吉『朝鮮童話集』発行⇒ドイツ留学後わずか 3 か月以内で刊行か？？？

1921 年 10 月～1924 年 4 月、芦田惠之助、朝鮮滞在、第 2 期日本語教科書編纂

近藤時司⇒「大正五年総督府が各道に委嘱して蒐めた郷土資料の伝説の写し等を大ざつぱに通覧した」と述べており、田中の整理した資料集及び報告書を関係者が閲覧していたことを示唆する（近藤時司「朝鮮の伝説と洪水」『朝鮮及満洲』345、1936 年 8 月、60 頁）。

◎日本語朝鮮説話集の分析で分かること

①総督府教科書における説話の収録過程の究明可能（教育史）

②植民地期に展開された朝鮮説話研究の実相、関係者の関わり（新たな民俗学史）

③説話研究の形成、解放後との関わりを究明（植民地と近代）

④従来の研究は、前近代の漢文「文献説話」と解放後に採集された「口伝説話」に限定され、近代初期の研究成果に関しては無関心であったが、それを検証することで、朝鮮説話の史的展開、変容を捉えることができる（近代の変容、展開）

⑤植民地期文化史に関する新しい視点を提供（近代と伝統）

◎「ソルファ(説話)」概念 －三分法に基づく説話概念

・**広い意味**：今の韓国では、神話・伝説・民譚（昔話）の総称[2]

・**狭い意味**：神話と伝説を除いた民譚＝説話と捉える場合も

「フォークテイル（Folktale）」の翻訳語＝「民間説話」の省略形として成立

日本では前近代の「説話」研究と、民俗学や口承文芸研究の一領域としての「昔話」研究

一方、韓国では古典文学中心の**前近代の「文献説話」**研究と、**民俗学及び口碑文学研究の一領域としての「口伝説話」**という分け方も可能であるが、両者は「説話」という共通の用語を使っており、より密接な関わりを持って研究されてきた傾向が強い。本稿では、韓国での広い意味での説話概念を取り入れる。

---

[1] 拙稿「近代における朝鮮説話集の刊行とその研究―田中梅吉の研究を手がかりにして―」（徐禎完・増尾伸一郎編『アジア遊学 138 植民地朝鮮と帝国日本』勉誠出版、2010 年）を参照。

[2] ＊張德順『説話文学概説』二友出版社、1975 年；＊崔雲植『한국서사의 전통과 설화문학（韓国叙事の伝統と説話文学）』民俗苑、2002 年；小峯和明「東アジアの説話世界」（小峯和明編 『漢文文化圏の説話世界』 竹林舎、2010 年）などを参照。以下、ハングル文献には、＊印を付けて日本語文献との混同を避けることにする。

◎日本語朝鮮説話集の範囲
漢文文献説話集を訳したもの、植民地期のハングル資料集を和訳したもの
朝鮮人生徒の日本語作文及び現地調査などを通して「口伝説話」を採集したもの
文献説話の近代的な変容を示す説話集
単行本：新聞・雑誌に掲載後、単行本化されたものも多いので、単行本を通して同時代の一般的な傾向を窺い知ることができる

◎資料へのアプローチ
従来の研究⇒日本人の資料集は帝国日本における植民地政策の一環、
朝鮮人の資料集は植民地期に抹殺されていく朝鮮文化を守るための抵抗運動
確かに植民地期朝鮮人の苦悩を捉える作業は重要であり、彼らの内面を描き出す作業は重要
しかし本稿では、日本人の植民史観、朝鮮人の抵抗民族史観という単純な二分法を乗り越えて、時代的背景及び人間関係にも注目して朝鮮人と日本人の資料を検討したい。[3] それぞれの編者の資料集を比較分析して、朝鮮人編者の思いを捉えることにも努めたい。
先行研究の指摘通り、朝鮮説話の研究は20世紀初めから日本人学者によって先導され、朝鮮説話の研究方向を形作っていった側面がある。[4] **朝鮮説話に関する研究は植民地期に本格的に行われ、その後の朝鮮人の研究にも刺激を与え、一定の影響あるいは反発をもたらした**と考えられる。
50種を超える説話集はそれぞれの編者によって多様な考え方の中で刊行。多様性にも注目。

◎戦前の研究
近代に入ってから日本の研究者によって本格的に朝鮮説話が採集され、それに基づいた説話研究も次第に行われるようになった。また、**当時の採集成果は同時代において多く取り上げられ、比較説話論も展開**された。1910 年代、高木敏雄(1876～1922)、南方熊楠（1867～1941）、西村眞次（1879～1943）、松村武雄（1883～1969）、田中梅吉（1883～1975）、清水兵三（ひょうぞう）（1890～1965）[5]を皮切りに、1920 年代以降は孫晋泰（ソン・ジンテ、民俗学者、歴史学者；1900～1960 年代半ば？）[6]、

[3]朝鮮民俗学の評価をめぐる二分法的アプローチに対する問題点については、次の論文を参照。
＊南根祐他『제국일본이 그린 조선민속(帝国日本が描いた朝鮮民俗)』韓国学中央研究院、2006 年。
＊南根祐『‘조선민속학’과 식민주의(‘朝鮮民俗学’と植民主義)』東国大学校出版部、2008 年。
南根祐「朝鮮民俗学会の創立と活動」（徐禎完・増尾伸一郎編、前掲書、2010 年）など。
[4] ＊曺喜雄「일본어로 쓰여진 한국설화/한국설화론（日本語で書かれた韓国説話/韓国説話論）1」（国民大学校、『語文学論叢』24 輯、2005 年）。
[5]田中梅吉と清水兵三については、次の拙稿をご参照いただきたい。
＊拙稿「시미즈 효조의 조선 민요・설화론에 대한 고찰(清水兵三の朝鮮民謡・説話論に対する考察)」（『温知論叢』28 輯、2011 年 5 月）。
拙稿、前掲論文。
[6]孫晋泰は 1950 年の朝鮮戦争時に北に連れ去られた後、消息が不明であるが、北から南に来た申敬完と朴ビョンホァの証言によると、孫は北の体制から疎外され、持病で苦労しながら 60 年代半ば死亡したとされる（＊崔光植「손진태의 생애와 학문활동(孫晋泰の生涯と学問活動)」、韓国歴史民俗学会編『南滄孫晋泰의（の） 歴史民俗学 研究)』民俗苑、2003 年、32-33 頁）。また申敬完の証言は、＊李泰昊『압록강변의 겨울』다섯수레、1991 年 （青柳純一訳『鴨緑江の冬』社会評論社、1993 年）を参照。また、1950 年には「新民族主義」を唱えた安在鴻、李仁榮らも北に連れ去られ、南における「新民族主義史観」の主要な理論家はいなくなった。

鍾敬文（中国の民俗学者；1903～2002）などによって行われた。[7]

高木は 1912 年に「日韓共通の民間説話」（『東亜之光』7－11、7－12)を発表し、日韓説話研究の道を開いた。高木の論考はそれに先行する高橋亨（1878～1967）の資料集『朝鮮の物語集附俚諺』（1910）に多く依存している。高木は、民間童話＝民間説話というタームを使い、本格的に朝鮮説話を論じ、その後の日本人及び朝鮮人の研究に影響を与えた。

高木は 1922 年に夭折したが、その影響を受けて日本語朝鮮資料集に注目した論著は、中田千畝（1895～1947）『日本童話の新研究』（文友社、1926）と『浦島と羽衣』（坂本書店出版部、1926）、蘆谷重常（蘆村；1886～1946）『国定教科書に現れたる国民説話の研究』（教材社、1936）、志田義秀『日本の伝説と童話』（大東出版社、1941）などがある。

◎戦後日本で植民地期採集資料を顧みなくなったのは、敗戦に伴う植民地及びその記憶の喪失とともに、早急な比較研究を警戒した柳田国男の影響もあったと思われる。柳田は 1930 年に『日本昔話集』上巻を編み出し、それは後に『日本の昔話』と書名を改めて広く読まれた。これに対して、『日本昔話集』 下巻にはアイヌ篇（金田一京助）と琉球篇（伊波普猷）とともに、朝鮮篇（田中梅吉）、台湾篇（佐山融吉）も収録されていたが、「これまでまったく顧みられない一冊になった」。[8] 古典文学や交流史に比べて今日の昔話研究は比較研究が少ない状況である。このような状況を克服するために石井正己は、戦前の昔話採集の「歴史的事実を抹殺したところには、昔話の国際的比較研究も成り立たない」と指摘し、[9] 戦前に行われた昔話の採集及び研究史に対する全面的な再検討の必要性を喚起している。

一方、植民地期朝鮮においては、日本人による朝鮮説話研究に刺激を受けて、孫晋泰などによって説話研究が行われた。特に 1940 年以降、朝鮮語での執筆が厳しさを増す中で、朝鮮人による日本語朝鮮資料集が多く刊行されるようになった。しかし、解放後の韓国においては日本語朝鮮説話集に関する研究は、その多くが植民地期に作成され、日本語で刊行されたという理由もあり、長い間、顧みられなかったが、近年相次いで研究されている。権赫来は、朝鮮総督府『朝鮮童話集』（1924）と高橋亨『朝鮮の物語集附俚諺』（1910）などを検討してから、「**近代初期、日本学者らの採集した韓国説話が及ぼした影響を体系的に研究してこそ、初期韓国口碑文学史を正しく記述できる**」と指摘している。[10]

＜日本語朝鮮説話集の目録＞※印は、筆者の発掘資料　　http://www.nl.go.kr 原文

※1. 薄田斬雲（薄田貞敬）著『暗黒なる朝鮮』日韓書房、1908 年 10 月、京城（1909 再版）。

2. 高橋亨著『朝鮮の物語集附俚諺』日韓書房、1910 年 9 月、京城（1914 年 6 月には『朝鮮の俚諺集附物語』）＜萩野由之序＞。

※3. 石井研堂編述『日本全国 国民童話』同文館、1911 年 4 月、東京（1917 年六版）

4. 青柳綱太郎編『朝鮮野談集』朝鮮研究会、1912 年 1 月、京城。

---

[7] 孫晋泰と鍾敬文はそれぞれ朝鮮と中国民俗学の確立に大きく貢献している。孫は 1920 年代に、鍾は 1930 年代に西村眞次の下で留学し、比較説話に大きな関心を示した。詳細は、増尾伸一郎「孫晋泰と柳田国男―説話の比較研究の方法をめぐって―」（『説話文学研究』45 号、2010 年）を参照。

[8] 石井正己『植民地の昔話の採集と教育に関する基礎的研究』東京学芸大学報告書、2007 年、137 頁。

[9] 石井正己、前掲書、2007 年、144 頁。

[10] ＊権赫来「근대 초기 설화・고전소설집 『조선물어집』의 성격과 문학사적 의의（近代初期説話・古典小説集『朝鮮物語集』の性格と文学史的意義）」『韓国言語文学』64、2008 年、234 頁。

5. 楢木末実著『朝鮮の迷信と俗伝』新文社、1913 年 10 月、京城（1919 年再版）＜今村鞆等序＞。
※6. 稲垣光晴著『オンドル土産』慶南印刷株式会社、1918 年 2 月、釜山。
※7. 榎本秋村『世界童話集 東洋の巻』実業之日本社、1918 年 4 月、東京＜萩野由之序＞。
8. 三輪環著『伝説の朝鮮』博文館、1919 年 9 月、東京＜はしがき＞。
※9. 松本苦味（圭亮）編『世界童話集 たから舟』大倉書店、1920 年 7 月、東京。
10. 山崎日城（山崎源太郎）著『朝鮮の奇談と伝説』ウツボヤ書籍店、1920 年 9 月、京城。
※11. 八島柳堂（行繁）著『童話の泉』京城日報代理部、1922 年 3 月、京城（5 月再版）。
※12. 樋口紅陽訳著『童話の世界めぐり』九段書房、1922 年 5 月、東京＜巌谷小波すゐせん＞。
※13. 崔東州著述、清水鍵吉抄訳『五百年奇譚』自由討究社、1923 年 8 月、京城（細井肇編の鮮満叢書 11 巻、1926 年 9 月朝鮮研究叢書 9 巻、1936 年東京朝鮮問題研究会から朝鮮叢書三巻）。
※14. 田島泰秀著『温突夜話』教育普成株式会社、1923 年 10 月、京城＜小倉進平序文＞。
※15. 世界童話刊行会（脇坂要太郎）『新訳 東洋の昔物語』日本出版社、1924 年 8 月、大阪。
16. 朝鮮総督府（田中梅吉）『朝鮮童話集』大阪屋号書店、1924 年 9 月、京城。
17. 松村武雄著『第十六巻日本篇 日本童話集』世界童話大系刊行会、1924 年 9 月、東京（1929 年 11 月には『朝鮮・台湾・アイヌ童話集』近代社版、1931 年 6 月『日本童話集下』誠文堂版（1933 年 1 月十版）、1934 年 1 月『日本童話集下』金正堂版（1938 年 5 月十版）。
18. 中村亮平編『朝鮮童話集』冨山房、1926 年 2 月、東京（1938 年 3 月五版、1941 年 11 月再版）。
※19. 大塚談話会同人（立川昇蔵）『新実演お話集 蓮娘』第 1 集、隆文館、1926 年 5 月、東京。
20. 青柳南冥（青柳綱太郎）著『朝鮮史話と史蹟』朝鮮研究会、1926 年 7 月、京城（1928 年 5 版）。
21. 朝鮮山林会慶北支部『朝鮮に於ける山林と伝説』1926 年 9 月、大邱（1928 年 4 月、再版）。
22. 鄭寅燮著『温突夜話』日本書院、1927 年 3 月 18 日、東京（22 日三版）＜日夏耿之介等序＞。
23. 大阪六村（大坂六村）著『慶州の伝説』芦田書店、1927 年 4 月、東京（1930 年に六版、1932 年に慶州から田中東洋軒版（1940 年九版）、1942 年に京都の桑名文星堂から増補版）。
24. 今村鞆著『歴史民俗朝鮮漫談』南山吟社、1928 年 8 月、京城（1930 年 6 月二版）＜志賀潔序、和田一郎序、序＞。
25. 中村亮平他編『支那・朝鮮・台湾神話伝説集』近代社、1929 年 1 月、東京（1934 年 1 月には『朝鮮台湾支那神話と伝説』大洋社版初版、1939 年六版梶井文庫、大阪府立中央図書館所蔵、1934 年 4 月には誠文堂版、1935 年 9 月には大京堂から『支那・朝鮮・台湾神話と伝説』）。
※26. 萬里谷龍児編著『仏教童話全集 第七巻 支那篇三 附朝鮮篇』鴻盟社、1929 年 2 月、東京。
27. 田中梅吉、金聲律訳『興夫伝 朝鮮説話文学』大阪屋号書店、1929 年 2 月、京城。
28. 田中梅吉他著『日本昔話集下 朝鮮篇』アルス、1929 年 4 月、東京。
29. 近藤時司著『史話伝説 朝鮮名勝紀行』博文館、1929 年 5 月、東京＜坪谷水哉序＞。
※30. 永井勝三著『咸北府郡誌遺蹟及伝説集』会寧印刷所出版部、1929 年 9 月。
31. 孫晋泰著『朝鮮民譚集』郷土研究社、1930 年 12 月、東京。
32. 八田己之助著『楽浪と伝説の平壌』平壌研究会、1934 年 11 月。
※33. 八田蒼明（八田己之助）著『伝説の平壌』平壌名勝旧蹟保存会、1937 年 3 月。
※34. 八田蒼明（八田実）著『伝説の平壌』平壌商工会議所、1943 年 7 月＜八木朝久跋＞。
※35. 社会教育会編（奥山仙三）『日本郷土物語下』大日本教化図書株式会社、1934 年 12 月、東京（1939 年 6 月五版）。
※36. 細谷清著『満蒙伝説集』満蒙社、1936 年 6 月、東京（11 月三版）。
※37. 満洲帝国政府特設満洲事情案内所（谷山つる枝）編『満洲の伝説と民謡』満洲事情案内所、1936 年 11 月、新京（1938 年、1940 年 8 月改訂版、1938 年 6 月東京松山房から谷山つる枝著『満洲の習俗と伝説・民謡』）。
※38. 朴寛洙著『新羅古都 慶州の史蹟と伝説』博信堂書店、1937 年 3 月、大邱（朝鮮語版『新羅古都 慶州附近의 伝説』（京城清進書館、1933 年）の増補日本語版）。
※39. 曺圭容著『朝鮮の説話小説』社会教育協会、1940 年 9 月、東京。
40. 張赫宙著『朝鮮古典物語 沈清伝 春香伝』赤塚書房、1941 年 2 月、東京。
41. 張赫宙著『童話 フンブとノルブ』赤塚書房、1942 年 9 月、東京。
42. 鐵甚平（金素雲）著『三韓昔がたり』学習社、1942 年 4 月、東京。

43. 鐵甚平著『童話集 石の鐘』東亞書院、1942 年 6 月、東京。
44. 鐵甚平著『青い葉つぱ』三学書房、1942 年 11 月、東京。
45. 金素雲著『朝鮮史譚』天佑書房、1943 年 1 月（1943 年 8 月再版）、東京。
46. 鐵甚平著『黄ろい牛と黒い牛』天佑書房、1943 年 5 月、東京。
47. 三品彰英著『日鮮神話伝説の研究』柳原書店、1943 年 6 月、大阪。
48. 申来鉉著『朝鮮の神話と伝説』一杉書店、1943 年 9 月、東京＜秋葉隆等序＞。
49. 金海相徳編『半島名作童話集』盛文堂書店、1943 年 10 月、京城。
50. 金海相徳編『朝鮮古典物語』盛文堂書店、1944 年 6 月、京城（1945 年再版）＜**東原寅燮**序＞。
51. 森川清人編著『朝鮮 野談・随筆・伝説』京城ローカル社、1944 年 3 月（11 月再版）。
52. 豊野実（崔常壽）著『朝鮮の伝説』大東印書舘、1944 年 10 月、京城。
53. 朝日新聞社編（張赫宙）『大東亜民話集』朝日新聞社、1945 年 3 月、東京。
＜その他＞
『伝説童話調査事項』（1913 年、朝鮮総督府学務局調査報告書、釜山大学校図書館所蔵）。
寺門良隆編『大正十二年 伝説集』（1923 年、新義州高等普通学校 2 年生の日本語作文集）。
『昭和十四年一月 咸鏡北道伝説（四年生）』(1939 年、鏡城公立農業学校 4 年生の日本語作文集)。
＜版本未確認資料＞
『朝鮮童話』全三巻、活文社、京城、1925 年 1 月前後か。
『民謡 童話 春の友』1934 年 4 月 17 日、兵庫、金基憲、1,700 部発行。

◎先行研究の検討

分けて三つの方向で研究されてきた。

第一は、日本語朝鮮説話集を個別に検討する研究[11] 一方、重要な資料集であるにもかかわらず、研究されていないものも数多く存在している。

第二は、20 世紀以降に展開された朝鮮説話研究史を概括し、その中で**日本語資料集の性格を検討したものと、**[12] **日本語資料集の書誌**である。

---

[11] ＊大竹聖美「1920 년대 일본의 아동총서와 「조선동화집」（1920 年代 日本の児童叢書と「朝鮮童話集」）」『童話와 翻訳』2 輯、2001 年；西岡健治「高橋仏焉/高橋亨の「春香伝」について」『福岡県立大学人間社会学部紀要』14(1)、2005 年； ＊権赫来、前掲論文；＊権赫来「조선총독부의『조선동화집』(1924)의 성격과 의의（朝鮮総督府の『朝鮮童話集』(1924)の性格と意義）」『童話와 翻訳』5 輯、2003 年；＊김경희「『朝鮮童話集』에서 사라진 토끼의 웃음（『朝鮮童話集』から消された兎の笑い）」 『児童青少年文学 研究』12、2008 年；＊백민정「『조선동화집』 수록 동화의 부정적 호랑이像 偏載 현황과 원인(『朝鮮童話集』収録童話の否定的虎像偏載の現況と原因)」『語文研究』58、語文研究学会、2008 年；＊서동수「아동의 발견과 '식민지국민'의 기획（児童の発見と'植民地国民'の企画）」『童話と翻訳』16, 2008 年；金泳南「中村亮平『朝鮮童話集』における「美しい朝鮮」の創出」（東大比較文学会『比較文学研究』77、2001 年）；増尾伸一郎「孫晋泰の比較説話研究」（孫晋泰『朝鮮民譚集』勉誠出版、2009 年）；＊盧英姫「金素雲の 児童文学世界」（『東大論叢』23 輯、同徳女子大学校、1993 年）；＊拙稿「薄田斬雲과 한국설화집「조선총화」에 관한 연구（薄田斬雲と韓国説話集「朝鮮叢話」に関する研究）」『童話와 翻訳』20 輯、2010 年；拙稿「植民地期朝鮮における伝説の発見―大坂金太郎（大坂六村）の新羅・慶州の伝説を中心に―」（『学芸社会』26、東京学芸大学、2010 年）；拙稿「高橋亨の『朝鮮の物語集』における朝鮮人論に関する研究」（『学校教育学研究論集』24、東京学芸大学、2011 年）など。

[12] 崔仁鶴『韓国昔話 の 研究― そ の 理論 と タ イ プ イ ン デ ッ ク ス ―』弘文堂、1976 年 ；＊張德順『説話文学概説』二友出版社、1978 年； ＊曺喜雄「日本語 で 書 か れ た 韓国説話/韓国説話論 1」、前掲論文、 2005 年；＊李在潤「韓国説話의 資料蒐集研究史)」（世宗語文学会『世宗語文研究』5・6 輯、 1988 年） ； ＊申明淑「설화연구사에 대한 비판적 성찰(説話研究史 に 対 す る 批判的省察)」 （檀国大学校、 『国文学論集』 17 輯、2000 年）； 大竹聖美『植民地朝鮮 と 児童文化―近代日韓 児童文化 ・文学関係史研究―』社会評論社、2008 年 ； 姜在哲「설화문학에 나타난 권선징악의 지속과 변용의

日本人の資料集＝植民地政策の一環、朝鮮人の資料集＝抵抗運動としての側面を強調してきた傾向がある。しかし、申明淑の指摘通り、日本人の植民史観、朝鮮人の抵抗民族史観という単純な二分法を乗り越えて資料集の限界とともにその価値を探し出す姿勢が求められている。[13] 朝鮮説話研究史とともに一方では、櫻井義之などによって詳細な書誌研究も行われてきた。[14] しかし、説話研究史において先行書誌の業績が丁寧に反映されていない。例えば、櫻井義之（1904～1989）の書誌は、解題とともに目次までも紹介しており、参考になるが、先行研究の中では櫻井の書誌が参照されていない。櫻井は早い時期（1979）から朝鮮総督府編『朝鮮童話集』（1924）の解題の中で、「田中梅吉（学務局、後京城大学教授）の執筆によるもの」と明記しているが、先行研究ではそれが言及されていないからである。

第三には、「瘤つき老人」（瘤取り）、「きこりと仙女」（羽衣）、「三年坂」などの**個別説話、あるいは動物譚、兄弟譚を取り上げ、植民地期に採集された資料の変容を考察**する研究である。[15] これらの研究は日本人の資料採集の問題点を指摘したり、朝鮮人の資料集との違いを強調したり、日本語朝鮮説話の中でのそれぞれの相違点及び共通点を検討したりする方向で行われている。

しかし、例えば「きこりと仙女」（羽衣）は日韓の共通類話として注目され、植民地期に最も多く採集された話である。従来の研究のように、その一部を取り上げて結論を出すのではなく、全体を丁寧に取り上げ、時代別に「きこりと仙女」（羽衣）がいかなる変容を遂げながら採集されたのかを検証する作業が求められる。

また、**書誌の不備という致命的な問題、また不完全な書誌であるにもかかわらず、その書誌の成果さえも研究史に参照・反映されなかった**という問題を抱えている。

そこで筆者は、まず精度の高い書誌を作成することから始めた。また、ハングル等で刊行された

의의와 전망(説話文学に現われた勧善懲悪の持続と変容の意義と展望)」（檀国大学校東洋学研究所編『韓国民俗文化の近代的変容』民俗苑、2009 年）など。

[13] ＊申明淑、前掲論文、191、197 頁。

[14] 次の書誌を参照した。末松保和「伝説・民話・諺・民謡（童話・童謡共）」『朝鮮研究文献目録 1868～1945 単行書編』（影印版、汲古書院、1980 年、初版は 1972 年）。
崔仁鶴「韓国昔話資料文献」『朝鮮昔話百選』（日本放送出版協会、1974 年）。
櫻井義之「民俗」『朝鮮研究文献誌―明治・大正編―』（龍渓書舎、1979 年）。
梶井陟「朝鮮文学の翻訳足跡（三）―神話、民話、伝説など―」（『季刊三千里』24、1980 年 11 月）。
大村益夫・布袋敏博編『朝鮮文学関係日本語文献目録 1882.4-1945.8』早稲田大学語学教育研究所大村研究室、1997 年。
西岡健治「日本への韓国文学の伝来について(戦前編)」（染谷智幸・鄭炳説編『韓国の古典小説』ぺりかん社、2008 年）など。

[15] ＊金歡姫「「나무꾼과 선녀」와 일본「羽衣」설화의 비교연구가 안고 있는 문제점과 가능성（「きこりと仙女」と日本「羽衣」説話の比較研究が抱いている問題点と可能性）」（『冽上古典研究』26 輯、2007 年）；＊金和經「일본날개옷 설화의 연구（日本羽衣説話の研究―韓国の「きこりと仙女説話」との関係を中心とした考察―）」（嶺南大学校『語文学』95 輯、2007 年 3 月）；＊千惠淑「설화의 개작과 식민지근대의 주입（説話の改作と植民地近代の注入―『普通学校 朝鮮語読本』の`三年峠`を中心に―）」（安東大学校人文科学研究所編『東アジアと韓国の近代』月印、2009 年）；＊大竹聖美「「조선동화」와 호랑이（「朝鮮童話」と虎」―近代日本人の「朝鮮童話」認識―）」『童話와 翻訳』5 輯、2003 年；＊金容儀「식민지 지배와 민담의 월경(植民地支配と民譚の越境―猿蟹合戦の韓日比較―)」『日本語文学』42 輯、2009 年；＊朴美京「日本人의 朝鮮民譚研究考察）」（檀国大学校『日本学研究』28 輯、2009 年）など。

資料集も視野に入れて、日本語資料集と比較してその関わり及び違いを検討する。そして新たに発見した日本語資料集を分析することで、個別研究の枠組みを乗り越え、その全般的な推移と性格について考察してきた。

◎日本語朝鮮説話集の内容

前近代の説話集は、金起東(キム・ギドン)編『韓国文献説話全集』全 10 巻（民族文化社、1981）、鄭明基(チョン・ミョンギ)編『韓国野談資料集成』全 23 巻（古文献研究会、1987）、朴湧植(パク・ヨンシク)・蘇在英(ソ・ジェヨン)編『韓国野談史話集成』全 5 巻（国学資料院、1995）、金鉉龍(キム・ヒョンニョン)編『韓国文献説話』全 7 巻（建国大学校出版部、1998～2000）などによってまとめられた。[16]

それに対して、近代に刊行された説話集に関する本格的な研究はやや遅れた。そこで鄭明基(チョン・ミョンギ)は、奇談・才談・笑話集を多く発見して『韓国才談資料集成』全 3 巻（寶庫社、2009）を刊行した。鄭明基(チョン・ミョンギ)の研究によると、ハングル・漢文県吐[17] 等で出された笑話中心の説話集が植民地期に 20 種以上が刊行されたが、その約半数が 1920 年代に刊行され、植民地空間の中で奇談・笑話が広く消費されたことが分かる。[18] 金埈亨(キム・ジュンヒョン)は、前代の野談集と直接的に関連する近代に出版された「活版本」だけでも 10 種があると指摘した。[19] 近代才談集と近代野談集の間には明確な区分があるわけではなく、両者の間には「奇談」などの題名の付いた本が重なっており、編者や出版社も重複している。重複する出版は商業出版によるものであったと思われるが、それとともにこれらの出版物が植民地大衆から根強い支持を得ていたことを示唆してくれる。朝鮮の笑話に注目してハングル本を参照した田島泰秀『温突夜話』（1923）が刊行される一方で、1923 年には崔東洲(チェ・ドンジュ)『五百年奇譚』が抄訳されており、ハングル等による近代説話集と日本語朝鮮説話集は一定の関わりを持っている。

◎近代以降の朝鮮説話への関心

朝鮮の説話に早くから注目したのは巌谷小波（1870～1933）である。小波は 1895 年に「朝鮮のお伽話」（『少年世界』）を連載した。[20] また、小波は 1899 年から刊行した『世界お伽噺』（博文館）と 1908 年からの『世界お伽文庫』にも「石の行方」（アーノウス Arnous のドイツ語版『朝鮮お伽噺及口碑』1893 年の「不思議な酒樽、一名、犬猫不和の由来」の翻案）、「龍宮の使者」（李人稙の日本語訳文を改作）など 4 編を紹介している。これらは日清戦争後の朝鮮半島への関心の高まりとともに現れている。[21] 鳥越信編『日本児童文学史年表』を通読するだけでも朝鮮の話が散見される。

53 種の資料集には説話、伝説、童話、野談、奇談（譚）、夜話、史話、史譚、漫談、民譚、昔話、

---

[16]詳細目録は、李市埈「韓国における説話文学の研究の現況」（『説話文学研究』45、2010 年）を参照。
[17]助詞や語尾のみをハングルで表記する漢文体。
[18]＊鄭明基「일제치하 재담집에 대한 재검토（日帝治下 才談集に対する再検討）」『国語国文学』149 号、2008 年。
＊鄭明基・李胤錫『旧活字本 野談의 変異様相 研究』寶庫社、2001 年。
[19]＊金埈亨「近代転換期 野談의 前代野談 受容態度」『韓国漢文学研究』41、2008 年。
[20] 鳥越信編『講座日本児童文学別巻 1 日本児童文学史年表』1（明治書院、1975 年）を参照。
[21] 大竹聖美「巌谷小波と〈朝鮮〉」（『日本言語文化』3、韓国日本言語文化学会、2003 年）と＊大竹聖美「巌谷小波와 近代韓国」（『韓国児童文学研究』15、2008 年）を参照。

物語などのタームを用いて刊行されており、その他にも迷信（俗信）・随筆・歌謡・俚諺集、研究書なども含まれている。朝鮮民俗学の確立者として評価される孫晋泰は、1927 年に神話、伝説、童話（昔話）などの理論上の区別の必要性を認めつつも、「現今民間に残っている神話、伝説、童話、古譚、雑説などを合わせて民間説話として取り扱える」と述べている。[22] 植民地資料集の特徴の一つは、神話・伝説・昔話などの区分が不明確なまま採集されたものが多いことである。[23]

◎日本語朝鮮説話集の時代区分

朴賢洙（パク・ヒョンス）の帝国日本の朝鮮調査の時代別展開を参照して[24]　日本語朝鮮説話集の時代を三つに分けたい。**第 1 期（1908～1918）は日本語朝鮮説話集の成立期**であり、朝鮮（人）の案内書として説話集が刊行された時期である。先述したように、1894 年の日清戦争前後に朝鮮に対する関心の高まりとともに巌谷小波などによって初めて朝鮮説話が日本に紹介されるようになったが、現地での採集を通した説話集の刊行は 1908 年から始まった。この時期の資料集は、朝鮮及び朝鮮人を知らせる目的で刊行されており、説話の中に朝鮮の民族性の原型があると主張して、**朝鮮（人）論としての資料集が刊行**されたという特徴を持っている。[25] 本格的な伝説集は刊行されていない

第 2 期（1919～1930）は日本語朝鮮説話集の発展期であり、児童中心主義の影響を受けて**「子どもの発見」に伴い、童話及び昔話が注目**を浴びた時期である。1919 年「3.1 朝鮮独立運動」によって朝鮮総督府は、「武断政治」から「文化政治」に植民地政策を転換せざるを得なかった。1920 年代に児童中心主義が植民地朝鮮でも注目を浴びることとなり、その中で「童話教育」の重要性も高まり、朝鮮説話が注目を浴びた時期である。また第 2 期は、最も多くの日本語朝鮮説話集が刊行された時期でもある。24 種の資料集の中、昔話集 11 種で昔話集が最も多く刊行された。

第 3 期（1931～1945）は日本語朝鮮説話集の拡大期であり、朝鮮（人）案内書及び植民地児童のための教育書としての注目が弱まり、大陸侵略の拡大とともに、戦時体制強化のために説話が活用された時期である。本研究では、この時期を単なる暗黒期として捉えるのではなく、その中で刊行された朝鮮説話集の意味を実証的に検討したい。第 3 期は 22 種の資料の中、伝説集 10 種で、**伝説集が最も多く刊行された時期**である。

---

[22] ＊孫晋泰「朝鮮民間説話의（の） 研究―民間説話의（の） 文化史的 考察(1)」『新民』27、1927 年、 122 頁。

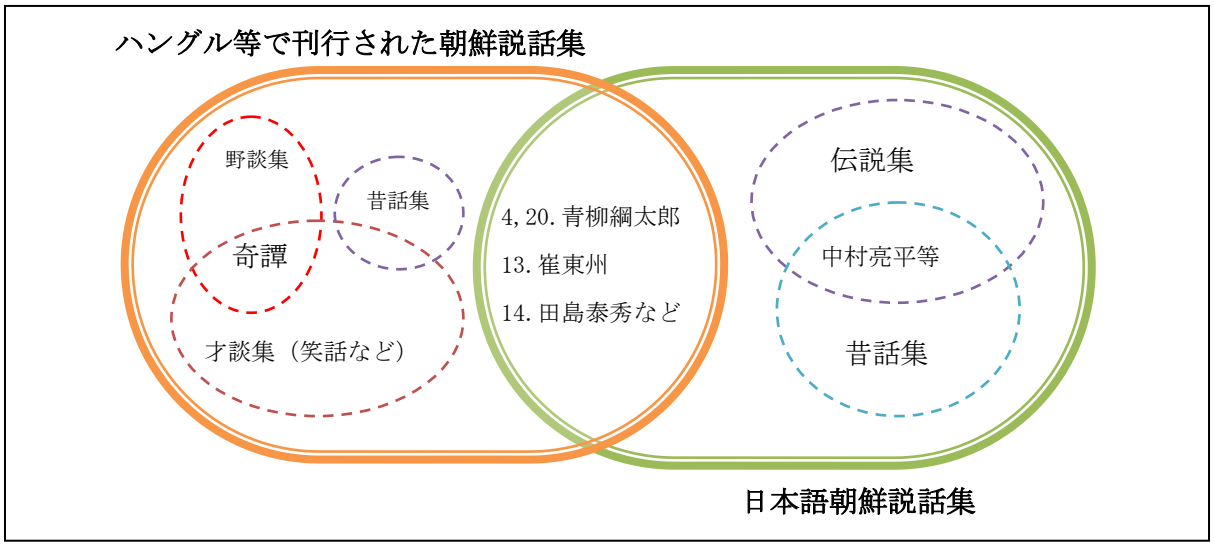
[23] 大正期までは帝国日本においても神話・伝説・昔話の区分は不明確なものであった（久野俊彦「書きとめられた伝説―地誌・郷土誌と伝説集―」、笹原亮二編『口頭伝承と文字文化―文字の民俗学 声の歴史学―』思文閣出版、2009 年、330 頁）。

[24] ＊朴賢洙『일제의 조선조사에 관한 연구（日帝の朝鮮調査に関する研究）』ソウル大学校大学院博士学位論文、1993 年、9 頁；＊朴賢洙「한국문화에 대한 일제의 視角（韓国文化に対する日帝の見方）」 『比較文化研究』4 号、1998 年、ソウル大学、38 頁、を参照。

[25] 初期説話集と朝鮮（人）論との関わりについては、次の論文を参照。＊拙稿、前掲論文、「薄田斬雲と韓国説話集「朝鮮叢話」に関する研究」2010 年;拙稿「植民地期朝鮮における伝説の発見―大坂金太郎（大坂六村）の新羅・慶州の伝説を中心に―」（『学芸社会』26、東京学芸大学、2010 年）;拙稿「高橋亨の『朝鮮の物語集』における朝鮮人論に関する研究」（『学校教育学研究論集』24、東京学芸大学、2011 年）など。

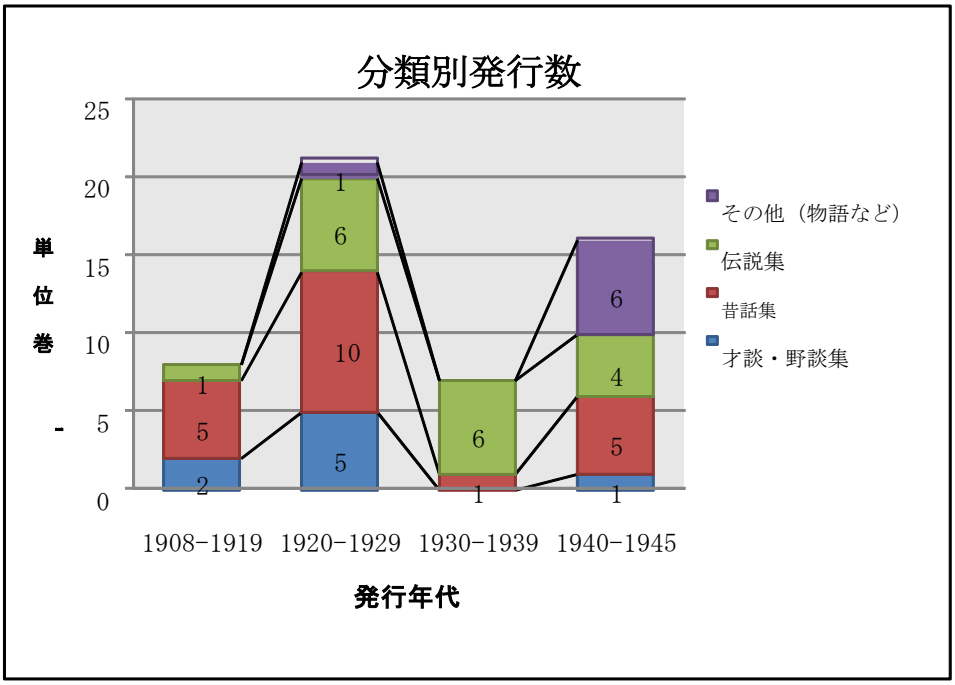
【表 1】日本語朝鮮資料集の分類

	才談・野談集	昔話、童話集	伝説集	その他(物語など)
資料集	4. 青柳綱太郎(1912) 5. 楢木末実(1913) 10. 山崎日城(1920) 13. 崔東州著述(1923) 14. 田島泰秀(1923) 20. 青柳綱太郎(1926) 24. 今村鞆(1928) 51. 森川清人(1944)	1. 薄田斬雲(1908) 2. 高橋亨(1910) 3. 石井研堂(1911) 6. 稲垣光晴(1918) 7. 榎本秋村(1918) 9. 松本苦味(1920) 11. 八島柳堂(1922) 12. 樋口紅陽(1922) 15. 世界童話刊行会(1924) 16. 総督府(田中)(1924) 17. 松村武雄(1924) 18. 中村亮平(1926) 19. 立川昇蔵(1926) 22. 鄭寅燮(1927) 28. 田中梅吉(1929) 31. 孫晋泰(1930) 43. 鐵甚平(1942. 6) 44. 鐵甚平(1942. 11) 46. 鐵甚平(1943) 49. 金海相徳(1943) 53. 朝日新聞社(1945)	8. 三輪環(1919) 21. 朝鮮山林会(1926) 21. 大坂金太郎(1927) 25. 中村亮平(1929) 26. 萬里谷龍児(1929) 29. 近藤時司(1929) 30. 永井勝三(1929) 32. 八田己之助(1934) 33. 八田蒼明(1937) 34. 八田蒼明(1943) 35. 社会教育会(1934) 36. 細谷清(1936) 37. 満洲事情案内所(1936) 38. 朴寛洙(1937) 42. 鐵甚平(1942. 4) 48. 申来鉉(1943) 52. 豊野(崔常壽)(1944)	27. 田中梅吉(1929) 39. 曺圭容(1940) 40. 張赫宙(1941) 41. 張赫宙(1942) 45. 金素雲(1943) 47. 三品彰英(1943) 50. 金海相徳(1944)
合計	8	21	17	7



植民地期ハングル等で刊行された資料集＝＜才談・野談集＞中心、日本語朝鮮資料集＝昔話・伝説集中心

「伝説」という題が付いているものは 17 種。それに対して、ハングル等で刊行された説話集には「伝説」の付く資料は見当たらない。[26]　「伝説」に次いで「童話」という題が付いているものは 12 種。その多くは今日の昔話に分類できるものである。



齊藤純の研究によると、帝国日本において、最も多く伝説集が刊行された時期は 1931 年から 1935 年であるとし、千葉徳爾のコメントを紹介している。千葉は 1927 年からの恐慌対策として、村の活力を高めるため、しきりに郷土愛の涵養が説かれたことを指摘している。[27] 千葉の指摘は、郷土及び伝説への関心が一方では国家主義的イデオロギーに支えられており、その政治性に関する重要な示唆を与えている。実際に日本語朝鮮説話集においても、1931 年から 1941 年までは昔話集は刊行されず、伝説集が 7 種刊行されている。1930 年代初めに朝鮮総督府は、朝鮮農村社会の経済的打撃を改善するために、農村振興運動（正式名称は農山漁村振興運動、1932～1940）を実施した。1932 年に農村振興委員会を設置し、1933 年から農家更生計画、農家構成計画を次々と展開した。その中で郷土娯楽も改善策が講じられるようになった。[28] 昭和恐慌の対策とともに 1930 年代におい

[26] 管見の限り、1945 年解放までにハングルで刊行された説話集の中で、伝説の付く説話集は、38. 朴寛洙が『新羅古都 慶州の史蹟と伝説』に先だって刊行された朝鮮語版『新羅古都 慶州附近의 伝説』（京城清進書館、1933 年）、＊金松編『伝説野史集』（野談社、1943 年）、＊李弘基『朝鮮伝説集』（朝鮮出版社、1944 年）の 3 冊のみである。李は朝鮮八道に分けて道別に 67 話を採録している。

[27] 齊藤純「伝説集の出版状況について―近現代の伝説の位置づけのために―」（『世間話研究』第 5 号、1994 年 6 月）。

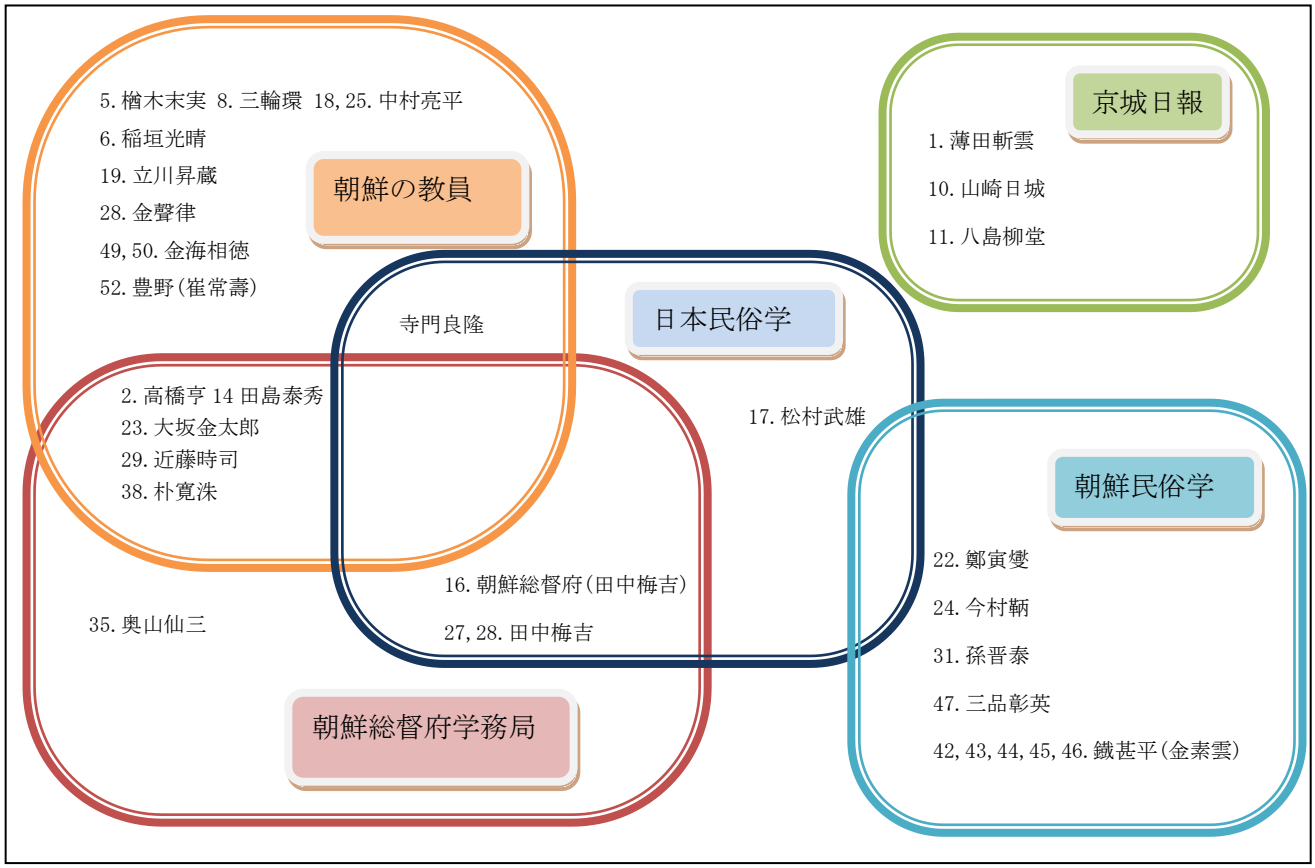
[28] 農村振興運動の中で推進された郷土娯楽振興政策については、＊이상현「일제강점기‘무대화된 민속’의 등장배경과 특징(日帝強占期‘舞台化された民俗’の登場背景と特徴)」（『比較民俗学』35 輯、2008 年 2 月）と＊김난주・송재영 「일제강점기 향토오락 진흥정책과 민속놀이의 전개과정(日帝強占期郷土娯楽振興政策と民俗遊びの展開様相)」 （『比較民俗学』44 輯、 2011 年 4 月）を参照。なお、農村振興運動の展開については次を参照。

て銃後の役割の重要性が高まる中、郷土文化は改良と振興の対象になり、そのような状況の中で伝説集が刊行されたことに留意しなければならない。

◎編者

1910 年 8 月から 1919 年 8 月まで 1,109 名に及ぶ内地人が朝鮮に渡り**教員**となった。[29] その中の教員の一部が日本語朝鮮説話集を刊行したということは、国語（日本語）教育と説話採集が強く結ばれていたことを示してくれる。また、1920 年度に実施された朝鮮総督府及び各地方主催の主な講習会の講師として、奥山仙三（朝鮮語）、高橋亨（朝鮮ノ教政）、楢木末実（国語）、朴寛洙などが活躍しており、説話集の編者の中には朝鮮教育に影響力を持つ人物がいたということにも注意しなけばならない。[30]

【図 1】日本語資料集の編者の関係図



朝鮮と日本の**民俗学関係者**によって資料集が刊行された。日本民俗学のカテゴリーに分類した田中梅吉（1883～1975）、松村武雄（1883～1969）、寺門良隆（1885～？）はいずれも柳田国男と高木敏雄が編集した『郷土研究』（第 1 期）に論文及び報告を掲載している。従来の研究では初期日

＊이윤갑「朝鮮農村 振興運動期（1932～1940）慶尚北道地域의 農業変動과 農民層分解）」『大丘史学』95 輯、2009 年など。

[29] ＊安龍植編『朝鮮総督府下 日本人官僚研究』Ⅰ（延世大学社会科学研究所、2002 年）と松田利彦「内務官僚と植民地朝鮮」（『思想』1029 号、2010 年 1 月、102 頁）を参照。

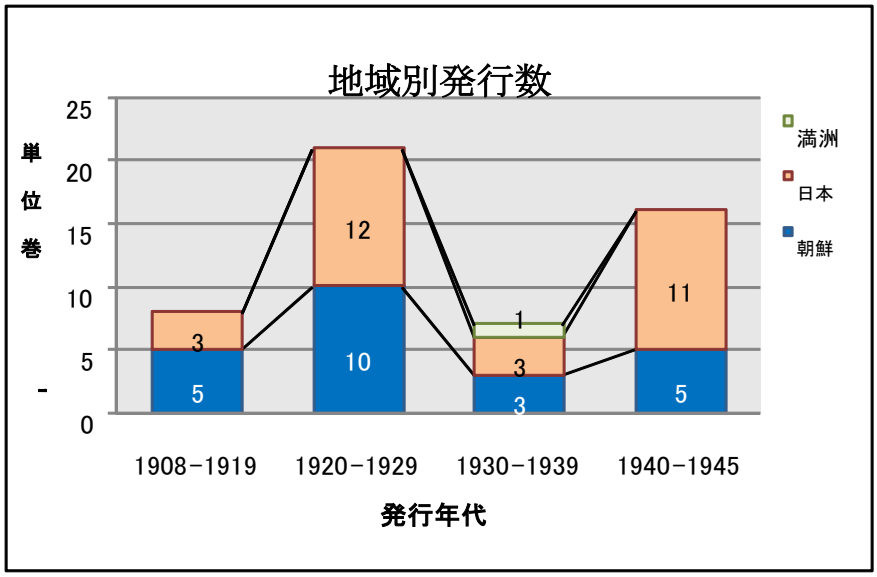
[30] 「講習会一束」『朝鮮教育研究会雑誌』59 号、1920 年 8 月、46－49 頁。

本民俗学の朝鮮説話への関心については、十分に検討されていないが、この三人は初期日本民俗学の関心が拡大され、朝鮮説話の関心へとつながったということで注目される。

一方、日本と朝鮮の民俗学者によって編み出された資料集もあるが、53 種の中で話者を確認できるのは 2 種に過ぎない。近代の早い時期に採集されたものの、近代資料集としては一定の限界を持っているのも事実である。21.朝鮮山林会慶北支部は応募当選作を集めたもので、1927 年版の 22.鄭寅燮には情報提供者が明記されていないが、解放後の改訂版でその出処が明かしている。植民地期において情報提供者を明記した唯一の編者は、孫晋泰『朝鮮民譚集』のみであり、価値の高い資料集といえる。

高橋亨、大坂金太郎など朝鮮語が流暢だった**編者**もいたが、ほとんどの日本人の編者は採集者としての**言語的限界**を持っており、日本語の出来る朝鮮人（主に生徒、朝鮮人教員）や、『三国史記』（1145）や『三国遺事』（1285）などを頼りにして資料集を編み出したことが分かる。

◎地域別発行



日本語朝鮮説話集の刊行は、1910 年代まで 8 種に留まったが、**1920 年代は 22 種**が刊行され、1930 年代に 7 種、**1940 年代に 16 種**刊行され、1920 年代と 40 年代に多く出された。また発行された場所は、朝鮮が 23 種、日本が 29 種、「満洲」が 1 種である。朝鮮と日本で大きな差は見られないが、1940 年代にはその差が大きく開き、「内地」で 2 倍以上刊行された。1930 年代中盤以降、総力戦体制が強化されていく中で、検閲や物資不足などで朝鮮での出版が厳しくなっていた。一方、内地では 1930 年代中盤以降、朝鮮の古典「春香伝」などをはじめとした「朝鮮ブーム」が起こり、文学（小説、詩など）、映画とともに朝鮮説話集が多く刊行されるようになったと考えられる。[31]

[31] 1940 年前後に巻き起こった帝国日本の朝鮮ブームについては次の論文を参照。
＊신하경「일제 말기 ‘조선붐’과 식민지 영화인의 욕망（日帝末期‘朝鮮ブーム’と植民地映画人の欲望）」『아시아 문화연구（アジア文化研究）』 23 輯、暻園大学校、2011 年 9 月。
＊梁東国「제국 일본 속의 ＜조선 시 붐＞（帝国日本 の 中 の ＜朝鮮詩 ブ ー ム ＞）」『아시아文化研究』23 輯、2011 年 9 月。
＊김계자「근대 일본문단과 식민지의 문학자（近代日本文壇 と 植民地 の 文学者）」『아시아文化研究』22 輯、暻園大学校、2011 年 6 月、など。
植民地期の関連目録は、大村益夫・布袋敏博編、前掲書、1997 年、を参照。

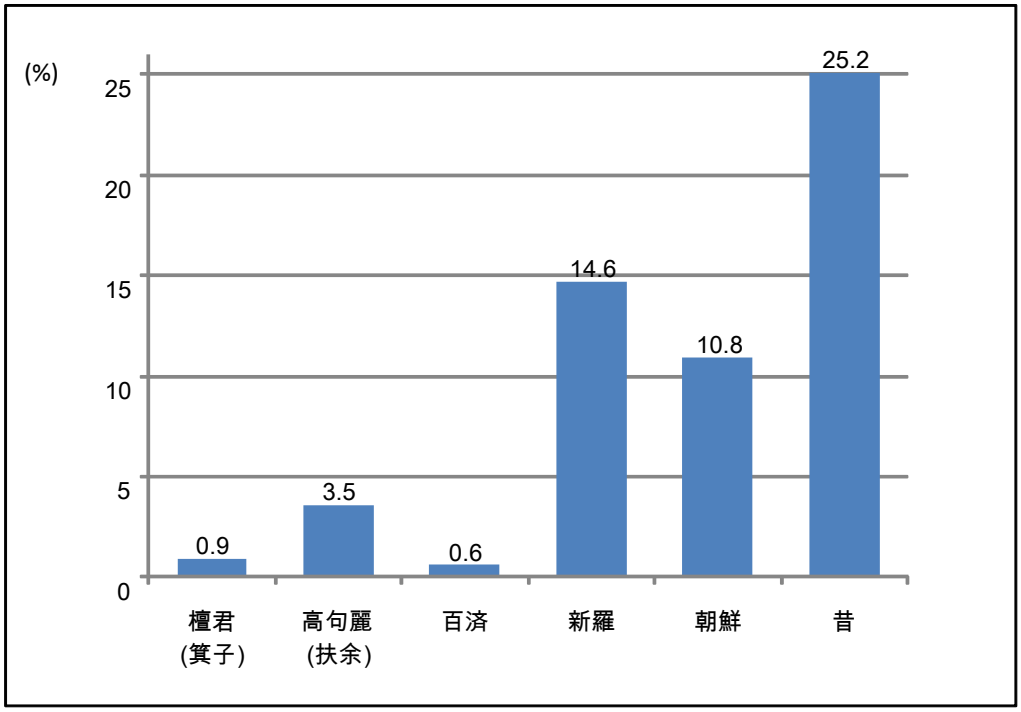
『モダン日本』（モダン日本社）は 1939 年に「朝鮮芸術賞」を創設し、1939 年と 1940 年に朝鮮版特集号を出し、「春香伝」、「沈清伝」、「洪吉童伝」、「淑英娘伝」を「伝説」として連載している。[32] 「兵站基地としての‘朝鮮’の重要性が認識され、その過程で‘朝鮮ブーム’が起った」ことに注意しなければならない。[33]

時代区分に従って分けてみると、第 1 期（1908～1918）に 7 種、第 2 期（1919～1930）に 24 種、第 3 期（1931～1945）に 22 種が刊行されているが、第 1 期まで伝説集は刊行されていない。第 2 期には伝説集が 7 種、昔話集は 11 種刊行されている。しかし、第 3 期の 1931 年から 1941 年までは昔話集が 1 種も刊行されていない。その代わりに第 3 期には 10 種の伝説集が刊行されている。

◎新羅説話への注目

【図 2】は日本語朝鮮説話集に収録された 1 千 5 百篇余りの話の時代的な背景の中、「檀君（箕子を含む）」、「高句麗（扶余を含む）」、「新羅」、「朝鮮時代」、「昔の話」だけに絞って、その話数をグラフ化したものである。日本語朝鮮資料集には新羅説話の占める比重が高いことが確認できる。【図 2】のように、高句麗（扶余を含む）の話が 3.5%、百済の話がわずか 0.6%であるのに比べて、新羅の話は 14.6%をも占めている。一方、朝鮮時代の話は 10.8%であり、「昔の話」（昔話と区別して「昔の話」とは「昔を時代的背景とする話」を指す）を除いて歴史時代に限定すれば、新羅の話の割合が最も高い。

【図 2】日本語朝鮮説話集に収録された説話の割合



[32]復刻版『モダン日本』1939 年版 11 月版（10 巻 12 号）・1940 年 7 月版（11 巻 9 号）、オークラ情報サービス、2007－2009 年を参照。

[33] ＊신하경、前掲論文、「日帝末期‘朝鮮ブーム’と植民地映画人の欲望」2011 年、88 頁。

しかし、前近代に刊行された野談集において、最も多く扱われる時代は朝鮮時代であった。慶州を背景とした野談に限定しても、半数以上が朝鮮時代を背景とした話となっている。任堕(1640-1724)編『天倪録』43 には、新羅武将・金庾信にまつわる話があるが、その背景は朝鮮時代で、慶州の儒生が金庾信を無視して死ぬという内容。また、徐有英編『錦溪筆談』135（1873）には、新羅眞平王代の新羅三宝・玉帯が高麗時代に発見されたという話。このように前近代の野談の中には、新羅に関わる話であっても背景はその後代の場合が多いのに対して、日本語朝鮮説話にはそのような構成は見当たらない。[34] ハングル等で刊行された近代説話集においても朝鮮時代を背景とする話が多い。解放後に採集された口伝説話においても同じ。1980 年代に集大成された『韓国口碑文学大系』全 82 巻（韓国精神文化研究院）の慶州地域の資料には、「新羅の人物よりは朝鮮時代の人物に関する伝説が中心であるのみならず、その量においても、はるかに多く伝承されている」。[35]

「昔の話」は、1918 年から増加して 1930 年まで最も多く採集された。しかし、1931 年からは「昔の話」より新羅の話が多く収録されている。1930 年を境にして昔話の採集が急速に減り、その代わりに伝説が増加している。新羅の話は 1908 年から 1944 年まで全時期に採集されたが、第 2 期の日本語朝鮮説話集の発展期以降に多く収録されている。この時期は、朝鮮総督府の古蹟調査事業が本格的に始まり、慶州の古蹟が再配置される時期と連動していることが確認できる。

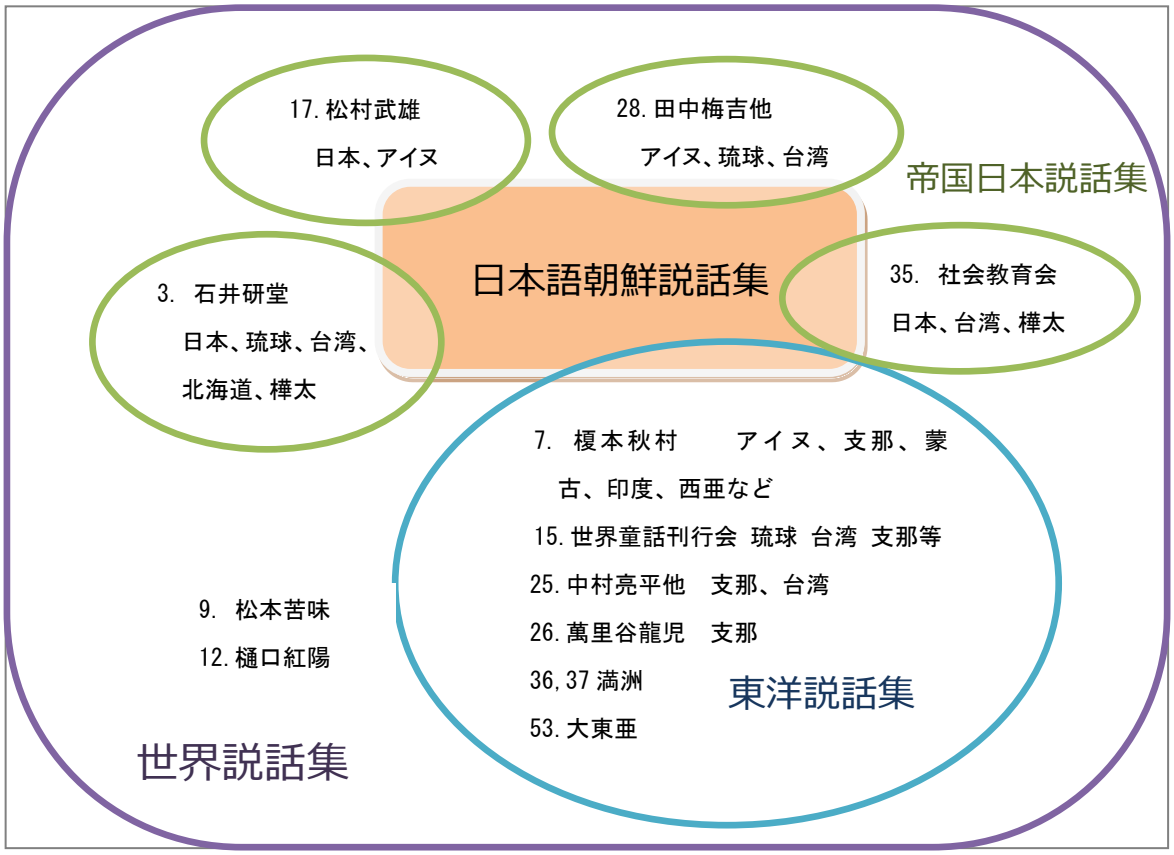
植民地期朝鮮において**朝鮮総督府の古蹟調査事業が進展する中で、慶州はその事業のシンボル**となる。古蹟調査により発掘・整備された古蹟を再配置し、植民地空間の中に古都慶州が創り出されるようになる。古都慶州の古蹟は新羅を想像する装置となり、**新羅の伝説はそれを補う役割**を果たした。伝説の慶州は観光地化されて頻繁に「外地」の奈良に喩えられ、日本語朝鮮資料集は新羅時代の古蹟地をストーリーテリングする作業を通して、新たに整備された古蹟に生動感を与えた。

◎帝国日本の中の朝鮮説話

次に日本語朝鮮説話集は、薄田斬雲『暗黒なる朝鮮』を除く全てのものが植民地期に刊行されたものであり、その時代的背景の中で生まれたものである。【図】朝鮮説話集の範囲のように、最も早い時期に朝鮮説話が日本説話集に編入されたものは、3.石井研堂（石井民司、文化史家；1865～1943）『日本全国 国民童話』である。石井は「内地」に続き、琉球、台湾、北海道、樺太とともに、「古屋の漏り」として知られている朝鮮説話「虎の失策」を 1 話のみ収録している。[36] また、17.松村武雄『日本童話集』（1924）と 28.田中梅吉他『日本昔話集』下（1929）にも「日本」説話集に朝鮮説話が含まれている。

【図 3】朝鮮説話集の範囲

[34] ＊徐大錫編『朝鮮朝文獻説話輯要』全 2 巻、集文堂、1991-1992 年、を参照。
[35] ＊李仁卿、前掲論文、「慶州地域伝承説話の性格と意味」2000 年、81 頁。
[36] アジア主義に共鳴した石井研堂（民司）は、早くから朝鮮に大きな関心を示し、児童向けに朝鮮の歴史地理、児童の風俗・遊戯・教育法をまとめた『朝鮮児童画談』（学齢館、1891 年）を刊行している。



◎**世界童話集**：1920 年代

7. 榎本秋村『世界童話集 東洋の巻』1918；西洋の巻

15. 世界童話刊行会（脇坂要太郎）『新訳 東洋の昔物語』1924；イソップ、西洋、日本等

17. 松村武雄著『第十六巻日本篇 日本童話集』世界童話大系刊行会、1924 年

18. 中村亮平編『朝鮮童話集』冨山房、1926 年

25. 中村亮平他編『支那・朝鮮・台湾神話伝説集』近代社、1929

28. 田中梅吉他著『日本昔話集下 朝鮮篇』アルス、1929

9. 松本苦味（1890～1923）『世界童話集 たから舟』（1920） 25 話中、朝鮮 2 話

12. 樋口紅陽『童話の世界めぐり』（1922）

→日本 2、朝鮮、印度、支那、西洋～

⇒朝鮮説話を独自の説話として捉えている。1920 年代の児童中心主義の影響

◎「日本」説話集の中の朝鮮

3. 石井研堂『日本全国 国民童話』（1911）「内地」、琉球、台湾、樺太、北海道、朝鮮

63 1 3 1 2 1

17. 松村武雄『第十六巻日本篇 日本童話集』（1924）日本の部 174、朝鮮の部 27、アイヌの部 73

cf 松村武雄『朝鮮・台湾・アイヌ童話集』（1929）朝鮮童話集、アイヌ、臺灣、生蕃童話集

28. 田中梅吉他著『日本昔話集』下（1929）アイヌ、琉球、台湾

35. 社会教育会編（奥山仙三）『日本郷土物語』下（1934）日本（北海道～沖縄）、台湾、樺太
⇒少ない？？？　帝国日本と「日本」

◎東洋（「支那」、「満洲」、「大東亜」）説話の中の朝鮮

7. 榎本秋村『世界童話集 東洋の巻』（1918）朝鮮、アイヌ、支那、蒙古、印度、西亜、土耳古
6　3　15　7　10　12　7

15. 世界童話刊行会『新訳 東洋の昔物語』（1924）琉球、台湾、支那等（9 話の中朝鮮 1 話）

25. 中村亮平『支那・朝鮮・台湾神話伝説集』（1929）支那、台湾

26. 萬里谷龍児『仏教童話全集 支那篇三 附朝鮮篇』（1929）1-4 印度、5-7 支那、8-10 日本

いずれも内地の本島の話は含まれず、朝鮮と台湾などの外地及び琉球、アイヌの説話が入っている。また、中国や印度など東洋の説話も収録

36. 細谷清『満蒙伝説集』

37. 満洲事情案内所（谷山つる枝）『満洲の伝説と民謡』

53. 朝日新聞社（張赫宙）『大東亜民話集』満州、支那、蒙古、ジャワ～、朝鮮、台湾
2　2　2　1　1　1

特に満州説話は、高句麗の説話が満州説話に編入され、満州国の成立に伴い高句麗説話に注目。

朝鮮説話は時代の推移とともにその枠組みが常に揺れ動いており、最初から明確な基準の中で分類されるものではなく、時代と編者あるいは出版社の意図によって変わり得る可変的なものであった。

日本語朝鮮説話の意味

☆架橋　前近代⇒近代
文献説話⇒口伝説話

☆今後の課題

①書誌、編者の履歴と関わり　日本人、朝鮮人の影響と関わり、共通点と違い

②採集過程の復元、関係者への聞き取り、資料発掘、影響関係

③内容、類型分析、テキストの影響関係、個別説話の推移、変容

④植民地期の影響、解放後の影響・反発、受容・変容、時代別推移

⑤イデオロギー、教科書、国民化、改作の実証

檀君の説話、檀君の存在を否定する言説が多い中で日本語朝鮮説話集には、檀君神話が 10 種以上収録されており、注目される。

戦後行われた日韓説話の類似性を強調する比較研究は、戦前の研究成果を徹底的に無視した上で成り立っており、戦前の研究結果に真摯に向き合っていない。

戦前の研究成果を明らかにし、その上で、それを踏まえての新しい研究が求められる。